

# 就学前教育における保育の文字表示について

—保育現場での文字環境への取り組み—

Character display in Pre-school education

—Approach to character environments at Kindertgartens—

松本和美\*, 石井はるか\*\*, 松田聖子\*\*\*

Kazumi MATSUMOTO, Haruka ISHII, Syoko MATSUDA

## 1. はじめに

今日までの研究において、「環境」に自らかかわって自分の学びにするという幼稚園教育の基本的理念を「教材」という独自の視点で捉え直し、それを軸に文字環境と保育者と子どもそれぞれに焦点を当ててきた。それにより「教材」は、保育者の独りよがりの構想だけでは出来上がらない、子どもの動きと歯車がかみ合って「教材」となる、ということが導き出された。保育環境を「教材」として捉えることで、保育者の保育構想と子どもの気づきや学びの関係の説明が容易になる。なぜなら子どもの動きは保育者が調節を図った教育的環境に応じて現れるものだからである。(細田, 2014) 子どもの活動と保育の場における文化・社会的システムとの相関的調整が適切に作動するように配慮された環境が「教材」であり、それが子どもの就学前教育の環境としてふさわしいと考える。そして文字環境についての教育的配慮もその括りの中で考えられる限り、子どもの教育的環境としてふさわしい、と言えるのである。

子どもの文字環境についての認識過程は、平易に表現すれば、感じる→かかわる→考える、という3段階の順序性に従う。この分類は、文字環境の体系的理解を可能にする視点である。これらを絡み合わせていくことで、文字環境を子どもに近い位置で捉えられ、どこに何をどのように位置づけるかが実際的に考えられる。子どもにとってはその状況に身をおくことが育ちにとってより有意になる。そのときに、1つの実体的教材は子どもにどのように捉えられるのか、向き合っているのか、保育者の教材観と違っていないか、という視点を併せ持ちたい。さらには絡み合わせて考えることで自然にその視点が持たられられるのである。

本研究では、保育者が保育の現場で子どもと向き合い、文字環境を3段階の順序に従ってとらえること、さらに「教材」としてどのように文字環境を保育に活かしているのか、その実態から言及したい。

## 2. 新幼稚園教育要領にみる文字への取り組み

美しい日本語を身につけ、生活することは幼児教育における基礎である。平成30年度施行の幼稚園教育要領では、幼稚園教育において育みたい資質・能力を踏まえつつ、幼児が幼児期の終わりまでに多少とも実現していくことが望まれる様子を、「幼児期の終わりまでに育てほしい姿」として意識して取り組むことが、今回の改訂で示された。その中の8「遊びや生活の中で、数量や図形、標識や文字などに親しむ体験を重ねたり②、標識や文字の役割に気づいたりし①、自らの必要感に基づきこれらを活用し、興味や関心、感覚をもつようになる。」(下線は筆者による)事を期待している。①文字の役割に気づくとは、幼稚園教育要領解説(2008)によると「幼児の日常生活の中にある文字、絵、標識などの記号には、名前などのように所属や所有を示すこと、看板や値札の様に内容を表示すること、さらには、書物や手紙などのように筆者の意志を伝達することなど様々な機能がある。幼児期は大人と共に生活する中で文字などの記号のこのような機能に気づき、日常生活の中で使用する意味を学んでいく時期である。」(幼稚園教育要領解説 保育の内容 領域「言葉」内容⑩ p150)と記されている。「環境を通して行う教育」を第一義とする就学前教育の理念に沿えば、日常の生活風景に埋め込まれた教示物や教材、現象に子どもが興味を向け、その子なりの感性を働かせて様々な事柄を吸収したりつくり出したりできるようにすることである。「単に正確な知識を獲得することのみを目的とするのではなく、環境の中でそれぞれがある働きをしていることについて実感できるようにすることが大切である。」(前掲書 領域「環境」1ねらい p121) ②文字などに親しむ体験とは、幼児が日常生活の中で、文字を遊具の様に見立て使っていくような姿など、「遊びと密着した形で文字の意味や役割が認識されたり、記号としての文字を獲得する必要性が次第に理解されたりしていく。」(前掲書 領域「言葉」保育の内容(4) p156) ことであ

\*〒230-8501 横浜市鶴見区鶴見2-1-3 鶴見大学短期大学部保育科

\*\*かぐのみ幼稚園 教諭 (Kagunomi Kindergarten)

\*\*\*こうりんじ幼稚園 主任 (Kourinji Kindergarten)





ジをわかせる工夫として、歌詞の表にポイントとなる絵を描き、歌詞の意味の理解を促した。この効果は文字をまだ読むことのできない子どもも、読める子どもの歌のリードに合わせて、絵のタイミングで歌うことができた。図5・6・7はオペレッタの出てくる役決めをするときに、見慣れない鳥たちについて、絵と特徴を掲示してイメージを浮かべることができやすいように工夫した。この掲示をきっかけとして、お話に出てくる登場人物のイメージを広げて、さらに自分たちで工夫するためのきっかけ作りとした。



図3 遠足の導入

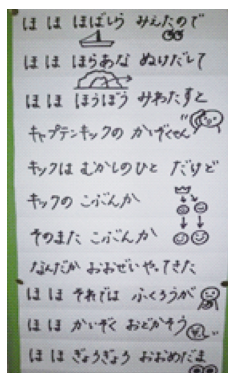


図4 発表会でうたう歌の歌詞表



図5 フラミンゴ



図6 コンドル

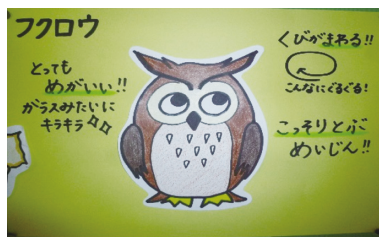


図7 フクロウ

### (3) 子どもたちからの思いを文字化する

年長児クラスでは、話し合い活動を多く行い、子どもたちが自分の意見を出し合って、クラス活動をみんなで作り上げていく、協同的な活動が多く行われる。

図8は、年長3クラスが集まった学年集会でこの掲示を元に話し合った。図9はY組がリレーで勝つための作戦を話し合い、文字化して掲示し共通理解を得ると共に、リレーを通してクラスの団結を図り、協同意識を高めることができた。

図10は子どもたちと一緒に言葉集めをした結果を書き出して掲示を行った。子どもたちは自分が発言した言葉が認められる喜びを味わい、さらに意欲へもつながっていった。

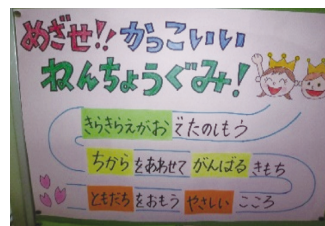


図8 年長組で目指すこと!

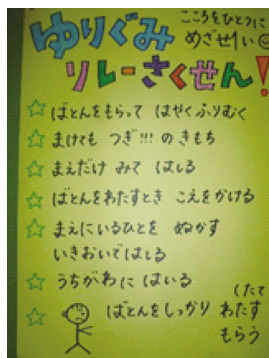


図9 運動会リレー作戦

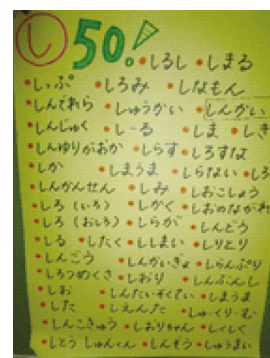


図10 言葉遊び・言葉集め

また、遊びの評価を皆で共有し何度も見返すことができ、さらに遊びを続けていったり、展開していく一つの区切りとなった。

### 事例1-考察

保育者が文字を環境として、さらに「教材」と捉えて使用している実践を3つの視点から捉えた。

(1) 生活場面では、掲示物である文字環境は、保育者からの知識の提供を言葉(会話)と文字のコラボによって、子ども一人一人の興味関心に応じて還元していくことができる。子どもそれぞれの時間やテンポで関わるができる「教材」であった。(2) 保育内容の共通理解は、視覚に訴える絵(イラスト)や写真を文字が説明し、補う役目をしている。イメージの共有と繰り返し内容を確認することができる、ていねいな「教材」であると言える。(3) 子どもたちの思いを文字化することは、文字が自分の思いやクラス全体の思いを表し、つながり合うための存在であることを認識できる。

これら3つの事例では、文字が伝える喜びや楽しさを味わう経験が深まった。それは、決して文字の使い方を学ぶ経験ではない。保育者として配慮すべき点は、これらの事例で、必ず保育者は言葉と一緒に文字を示していることである。文字を読ませる・文字に頼ってイメージさせる保育ではなく、文字を活かして保育する為の「教材」でなければならない。

### 【事例2. ページェント(野外劇)のお話づくりとストーリーの文字化】

D幼稚園において、ページェントとは10月中旬にあるけんこう祭(運動会)のプログラムの一つで、全園児参加型の野外劇のことである。2学期の活動として大きな山であり、重要なカリキュラムとなっている。そのお話づくりの過程を追ってみると以下ようになる。



(1) 様々な体験やイメージを元に、年長組一人一人がお話を作ってみよう！ (個人画によるお話作り)

平成27年9月7日(木)に、年長組は横浜市磯子区にある「横浜こども科学館」へ園外保育に出かけた。

園外保育に行く前の保育環境として、廊下の壁に「惑星の紹介」を貼ったり、保育室に宇宙の本を揃えて、いつでも読める環境を整えた。



図11 壁に惑星の紹介



図12 いつでも読める宇宙の本

横浜科学館は、5FからB2まで、館全体が巨大な宇宙船をイメージした体験型科学館である。フロアごとにテーマの異なる5つの展示室があり、子どもから大人まで、自分で触れて体感して、楽しく遊びながら宇宙や科学の不思議を学ぶことができる。

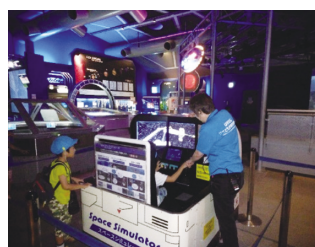


図13 科学館で興味津々



図14 本物の隕石も

子どもたちは幼稚園に帰って、体験したことをもとにイメージを広げてそれぞれに表現する～自分のイメージを持つ。



図15 科学館の振り返り



図16 身近材で望遠鏡作り



図17 科学館で経験したことを元にイメージを広げて絵を描く  
(個人画による表現)

\* 保育者は子ども一人一人の言葉を拾って、絵に込めたイメージやストーリーを絵の端に記録する。

(2) みんなのお話(絵)から一つのお話を作ろう!

保育者が描き終わった絵の個々のイメージを拾って分類し、起承転結をつける。

9月26日(火)担当保育者がつなげたお話を、素話で年長児に伝え、この話でよいか了解を得る。



図18 みんなの絵をつなげて素話



図19 個々のイメージを広げながら真剣に聞き入る

(3) ストーリーとイメージを共有しよう!



図20 年中児・年少児にストーリーを伝える



図21 ページメントのお話を廊下に貼って共有



図22・23・24・25 ページントのお話

年長児がストーリーを共有したうえで、保育者が絵の下に言葉をつける。

10月4日（水）紙芝居として、年中少児の子どもたちに、年長児からストーリーを伝える。

### 事例2－考察

ページントのお話作りの活動を通して、文字を用いた保育活動の効果と子どもの育ちについて考察する。

#### （1）共有

子どもの描いた絵を紙芝居としてお話をつなげ、文字標記をつけることにより、一人一人のイメージを年長児クラス全体で共有することができた。また、その絵一枚一枚にストーリーをつけることにより、より話の内容が普遍的に広く共有できるきっかけとなっている。

この活動において、お話を記録することによってストーリーの共有は以下の様に広がり、展開していく。

〔共有の広がり〕

- ①年長児と年長児担当の保育者の中での共有  
↓
- ②園児全体と園の保育者全員での共有  
↓
- ③行事担当の保護者の説明会や来園者の方々との共有  
↓
- ④その他、園に関わっている方々、絵を見る機会を持った方々との共有

#### （2）思考の整理

園外保育で心が揺さぶられたことを、文字を使うことで、文字を通して何らかの意味が伝わっていくおもしろさや楽

しさが感じられるように、子どもたち個々の話を作品の下にお話（文字）をつけた（図22, 23, 24, 25）。子ども一人一人の作品は紙芝居のようになり、子どもおよび保育者各々が、個人的であったり漠然としたイメージでしかなかったストーリーの輪郭がはっきりとした。

保育者は子どもたちと話し合いながら、どの絵をどこに配置するかを試行錯誤しつつ、楽しいストーリー展開を考えていく。子どもたちと意見がまとまり、起承転結がほぼはっきりすると、どんな役柄が必要かなど、足りないキャラクターや資料を改めて補充して、その後の活動が充実して広がりを持って行うことができた。

#### （3）繰り返し見ることができる

絵とそれに伴うお話（文字）を順番に並べて掲示することにより、自分のタイミングで子どもも保育者も繰り返し見て親しみを持ったり、内容を確認したり、咀嚼することができた。また、自分たちの作ったページントを友達や保護者などに語って聞かせることにより、自己充実感を味わうことができる。そして、この活動が、その先の活動（運動会）の内容の方向性的意思表示ともなり、保育が連動していくのである。文字について直接指導するのではなく、幼児の、話したい、表現したい、伝えたいという気持ちを受け止めつつ、日ごろの保育の中で伝える喜びや楽しさを味わえるようにすることが大切である。文字が様々なことを豊かに表現するためのコミュニケーションの道具である事に次第に気付いていくことができるよう心がけながら保育を行った。

#### （4）実践の資料として

保育は常に連続して流動していくので、活動の様子も常に変化していく。その中で、一つのターニングポイントとしての記録になる。保育の年間保育計画の中で、活動の連続性においても不可欠な実践資料となっている。

#### 【事例3：集団作りの過程における気持ちを文字化しての話し合い】

D幼稚園の保育では、子どもとの対話、子どもと作る保育ということ大切な視点として設けている。各発達段階に応じた内容で、話し合う場面を作っている。特に年長児は、行事のこと、日々の出来事について、「どう思うか?」「なぜそう思うか?」「どうしたらよいと思うか?」などを子どもと一緒に考える機会が多い。

テーマに沿って問いかけると、積極的に手を挙げて自分の考えを言うことを積み重ねて、集団作りの大事な一つの要素としている。また、積極性のなかった子が少しずつ発言できるきっかけともなりえる場となっている。保育者は子どもの言葉をなるべく大きな紙に書いて文字化して共有するようにしている。

（1）年長児2学期（9月下旬）におけるクラスの話し合い  
年長児U2組のなかで9月下旬に行われた話し合いの事



例を取り上げる。

2学期のけんこうまつり（運動会）に向かう、保育の充実期においては、子どもの心身の動きも仲間関係も活発になる時期である。活発になる反面自己中心的な言葉や、相手に強く出たり、自分を強く見せようとする姿もある。

担任保育者の「仲間としてもっと協力できるクラスに」との思いでの話し合いとなった。「うれしい言葉は気持ちがいよくなる」「いやな言葉は泣きたくなる」と、どんな言葉がうれしい気持ちか、悲しい気持ちか出し合い、文字化した（図26, 27）。気持ちに寄り添う言葉を書き出したら、改めてみんなで読み返し、心のありようについて考え話し合った。子どもたちは口々に嬉しいときの様子や気持ちを話したり、心が傷つく言葉について確認し合う姿があった。話し合いの最後には、うれしい気持ちであふれる2組にしていきたいねとよい雰囲気の話合いとなった。

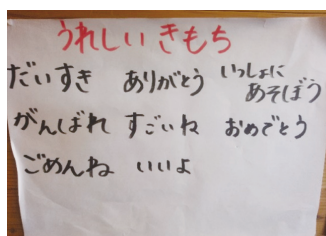


図26 嬉しい気持ち

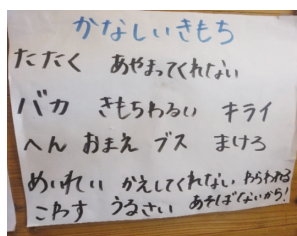


図27 悲しい気持ち

### 事例3－考察

子どもの中で揺れ動く気持ちは一人一人がそれぞれ持ち合わせており、それぞれがいろいろな感じ方をする。集団となったとき、その気持ちの衝突やすれ違いが起こることもあり、その難しさは子どもも大人も感じ方は同じである。

気持ちをあえて言葉として置き換えることは、上手な子どもいれば不器用な子どももいる。気持ちを言語化して、その言葉を文字化することにより、各々の気持ちが代弁される効果があったのではないか。

また、気持ちを「うれしいきもち」「かなしいきもち」と2つに分類したことが、話し合いを進めるうえで分かりやすさを生み、自分の気持ちと置き換えて考えるうえでもわかりやすさを生んだのではないかと考える。

そうした要因が、子どもの姿、クラスの姿にタイムリーに響いて、よい話し合いの時間となった。

この2枚の紙は継続して2学期の間掲示してあった。担任の願いの表れでもあり、分かりやすい表記の掲示は、スローガンとして、知らず知らずのうちに浸透する効果もあるのではないかと考えられる。

## 5. 総合考察

### －就学前教育における文字環境についての理解－

年長児の保育において、協同的な学びを高めるためには、文字を使った共通理解が役立つことが理解できた。改めて保育を振り返ってみると、思っている以上に文字を保育で多用していることに気づかされる。子どもの文字理解に個

人差はあっても、日常性の中で意外に違和感なく溶けこんでいる。ただし、個人差についてはもう少しフォローが必要な面はあるかもしれない。以下の5点が、保育に文字を活用することによる保育の利点として挙げられる。

①子どもも大人もたくさんの人と内容を共有できる

②振り返ったり、思考の整理に役立つ。記録にもなる。

③自分のタイミングで何度も見ることができる。

(掲示してあれば)

④様々な立場の人にも時を同じにしくなくても伝えやすい。

⑤集団においてシンボリックな役目を持ち、スローガンともなり得る。

本研究が着目した文字環境について、保育者が十分に配慮することにより、『自然な形で』身に付けられることが事例から理解できた。基本的に、文字機能を知ることとは、その文化や共同体の社会的枠組みに沿った使い方ができる、ということである。子どもは身近な大人とのやりとりや意図的な教育によって、文字を使って意味の操作と社会化が実行できるようになる。それは就学前の保育実践においては、保育者が選んだ実体的教材や、それによる指導・援助により文字機能が理解されるようになることである。しかし教材についての捉えが、文字機能そのものについて学ぶために用いるもの、というところに焦点が当てられると『自然な形で』身につけられる環境とはかけ離れる。だからこそ、保育者は保育で用いた文字環境を「教材」として捉え直し、それが保育者のどのような行為に結びついているのか、子どものどのような学びに結びついているのか、という関係性を理解しておくことが必要なのである。それにより『子どもの遊び』を大切にす無理のない形での指導と、子どもの認識活動の連続性の保障が実現される。一見すると「環境」として説明している事がらとそれほど変わらないように思えるかもしれない。しかし、子どもの動きは保育者が計画した教育的環境に応じて現れる。だからこそ、「教材」として捉えることで、保育者の保育計画と子どもの気づきや学びの関係が明らかとなる。つまり、子どもの活動と保育実践における文化・社会的システムとの相関的調整が適切に作動するように配慮された環境が「教材」なのである。そして文字環境についての教育的配慮もその括りの中で考えられる限り、子どもの教育的環境としてふさわしい、と言えるのである。保育者は、保育における教材の活用及び作成と、その具体的な展開の為の技術を実践的に習得して、目の前にいる子どもたちの育ちを保障していきたい。

### 引用文献・参考文献

- ・細田成子『就学前教育における子どもの文字環境について（1）－生活の中で文字の機能に気づき、使うこと－』保育の実践と研究 第19巻第1号 スペース新社保育研究室 2014
- ・萩谷みづき、細田成子『就学前教育における子どもの文字環境について（2）－教材を動的な概念と捉え、文字との関わりを体系的に考える－』保育の実践と研究 第19巻第2号 スペース新社保育研究室 2014